http://hokkaido-poland.com/pole.html

ポーランドから来た人々

札幌滞在——最初の一週間

イェージ・トマシェフスキ

かなり前から家内と日本への旅について話しあっていた。色々な本を読んだり、経験のある知人に聞いたり、最近テレビでよく放映されるようになった日本映画を見たりした。だから理論的には日本で何がわれわれを待ち受けているか、とくに日常生活の違いがどんなものかを知っていた。また、日本では誰も礼儀正しく、正直なこと、忘れ物が一週間路上にころがっていても誰も持ち去ろうとしないことなども知っていた。

われわれはまず札幌からの手紙で、役所での手続きの手間を少なくする方法について知らせを受けた。日本との最初の出会いは大使館であった。たしかに日本人は礼儀正しいという伝説を裏付けるものであった。ただ、決定が出るまでに何週間も待たなければならなかった。その間に航空券を買っておく必要があったが、ビザが遅れたので一時は秋まで出国できないという事態になった。飛行機が何ヵ月も先まで満席だったのである。しかし、結局はなにもかもうまい具合に運んで、きちんと期限通りにビザが出たし、航空券も買えた。日本の役所はゆっくりとではあるが、過ちなく動くようだ。こうしてわれわれは日本にやってきた。

第一印象は、われわれがまったくの文盲だということ。あちこちに図形芸術の作品のように見える看板がかかっているが、われわれには何のことやら分からない。英語や国際的な標識は、飛行場以外ではあまり見かけない。

次に、店や通りで意思を疎通するのが必ずしも容易ではないことが分かった。なぜなら外国語の知識はワルシャワよりもよいとはいえないからである。状況を救ってくれるのは、日本人の礼儀正しさで、これは間違いない。すでに地下鉄切符の自動販売機の扱いを誤ったことがある。駅員は日本語以外何語も解さない風であったが、一見複雑そうな問題もまるで子供の不始末のように簡単に落着した。おそらく経験から、外国から来た者はだんだんとさまざまな設備に慣れてゆくのだから、がんぜない子供のように扱わなければならないと知ってのことだろう。また、たいへん役にたったのはアパートにあった日常生活に欠かせないいろいろな機器の扱い方を記した手引きである。おそらくこれも外国人の生活を楽にしてやろうという願いの結果であろう。それは一挙手一投足ごとに感じられる。

とりあえず、ちょっと町を歩いて眺めてみる。小さな家庭菜園は手入れが行き届いていて、樹木の葉や花が色鮮やかできれいだ。ときどき見かける和服姿の人や芸術作品に驚く。尊敬を呼び起こすのは、日常生活に多くの伝統的な習慣が保存されていることだ。そうした風習にようやくいまお目にかかっているが、見たところ近代性と矛盾していないようだ。また、多くのけっして贅沢ではない日用品も芸術的な造形と何よりも高い品質への明らかな配慮の跡をとどめている。ただ、建築だけはどうもいただけない。少なくとも自分がいま住んでいる地区の建築は。

外国人は日本の食事に慣れるのに苦労する、洋食には滅多にお目にかかれないと聞いたことがある。事実は逆だ。そんな一様性は見あたらない。自分の慣れた食生活を守るのに大して苦労はいらない。しかし、私はぜひとも自分の食生活を守らなければならないとは思わない。

大きな印象を残したのは、六月三日土曜日のキャンパスでの学生との出会いである（この日は北大の学園祭であった——訳者）。学生はわれわれを温かくテント店に招き入れてくれた。そこではさまざまな馳走が用意されていた。われわれはテント店の一つに入って、テーブルについた。回りには笑い顔の若者たちの集まりができた。学生はいちばん英語ができる仲間を派遣してきたり、自分たちの間で質問を打ち合わせたりした。集まりは結局記念撮影で終わった。われわれにとってとても気持ちのよい雰囲気の中で札幌での第一週が終わった。

もちろん、一週間は余りにも短く、いくつかの問題を見逃しているだろうし、そのなかには大切な問題もあるかも知れない。しかし一週間の滞在だけでも、日本は各種の文献のなかで定着している日本観、あるいはわずか数年前に当地にいたことのある人々の記憶に残る日本観よりも急速に変化しているという結論を出すに十分だろう。今までのところ、自分が考えていたよりもはるかに僅かの相違にしか気がつかなかった。少なくとも外面的にはそうである。私の目を引いた特徴はとくに尊敬に値する。とりわけ私の念頭にあるのは、人々が見知らぬ者どうしでも日常的

な接触において示す善意、とくに子供たちが道であった未知の人に示すほほえみ、また生活の便宜のための数多くの設備、たとえば大きな交差点でメロディーで信号の変化を示す設備などである。

札幌で少しは見当がつくまでには、第一週の印象がどの程度当たっていたか、どの程度遠国から言葉も習慣も伝統も知らずにやってきた者の表面的な観察に過ぎなかったかを知るまでには、まだまだ沢山の月日を過ごさなければなるまい。

こういう話がある。その昔、プラハで賢者として知られたラビが死の床についていた。ユダヤ人の仲間は試練のときがやってくるものと考え、老いたるラビに自分の人生で得た最大の知恵は何だったかとたずねた。ラビは目を開き、ため息をついて言った。「一つ一つが違うということだ」

表面的な判断は頼りにならないものだ。現実はたいていの場合はるかに複雑であると分かる。けれども、この数日間に観察できた一事だけは変わらずに留まると確信している。それは伝統的な振る舞いや礼儀正しさに現われた人々の毎日を仲良く助け合って生きてゆく能力、また無数の些事に現われた美の感覚である。

（ワルシャワ大学政治学・新聞学部教授。本年六月より北大スラブ研究センターに十ヶ月間滞在予定。原文ポーランド語。伊東孝之訳・

7号89年7月）

札幌に住み始めて

小見　アンナ

日本への留学先が北海道と決まると、日本人の友人あるいは、北海道へ行ったことのあるポーランド人にどんな所か聞いてみました。

するとどの人も、「北海道は寒いよ、でも食べ物はおいしいし、人も親切で、良いところだ」。あるいは、「なんか、日本の中の外国のようだ」という人もいました。その外国のような北海道の人たちは私をどのように感じ、接しているのだろうかと興味を持ちはじめました。

そして、いよいよ北海道へやってきました。北海道がとても寒い所だと思い込んでいたので、毛皮を着てまふらを巻いて千歳空港を出ました。すると、まだ温かかったので背広だけで歩いている日本人のびっくりした目と会いました。

ポーランドに興味

札幌に住みはじめてから、まず感じたことは、人たちは皆、外国人に興味を持ち、店や地下鉄の中などでも、私がどこから来たのか質問をしてきます。その人々の中で、ポーランドとポートランドを間違えたりする人もいれば、ポーランドに行ったことのある人や、ニュースなどでポーランドのことを良く知っている人もいます。それら偶然に街中で会った人たちの中には、今私に生花を教えてくれている花の先生や、日本舞踊の先生、その他にも家にも招待してくださって、日本料理を食べさせてくれる人など、思いがけない出会いが、私の留学を一層楽しいものにしてくれています。

そして私をもっと驚かせたことは、北海道には、ポーランドに興味を持っている人たちが大勢いるということです。大学ではポーランド語コースが設けられ、それには四十人もの人が学んでいるということ、そして北海道とポーランドを結ぶ架け橋である北海道ポーランド文化協会があるということです。この協会がポーランドを北海道の人々が知る上でどれだけ貢献しているかということは皆さんの方が良くご存知だと思います。

日本で生活する上で、私はほとんど問題はありません。なぜなら、夫が日本人だからです。他の留学生の中には、自分の奥さんと子供を日本に連れて来ている人もいます。そして少しでも日本にとけこもうと努力しています。たとえば、子供を近くの幼稚園にかよわせたり、奥さんは、夫が日本に留学が決まると日本語を勉強し始めたり、なにもかもゼロからの出発ですから彼らの生活は大変だろうと思っていました。しかし、彼らは全く文句を言わずに、友人も多くでき、日本の生活はとても楽しいと言っています。やはりこれは北海道とポーランドの気候、風土、人の気持ちが似ているということが、ここに住むポーランド人たちを落ち着かせてくれるのだと、つくづく思います。

（北海道大学文学部留学生。専攻は日本史。原文のまま掲載。

11号90年5月）

ポーランド点描

―ワタさんにインタビューをして―

札幌に来て七ヵ月になる、マリウシュ・ワタさんに、ポーランドのお話をうかがいました。

ワタさんは、ワルシャワ大学日本学科を卒業。現在は北大文学部に籍を置き、日本語の研究をしています。

◇何故、日本語を学ぼうと思ったのですか。

日本語には、小学生の頃から興味がありました。日本映画を見て、音がきれいだと思いました。しかし日本語を本格的に勉強したのはワルシャワ大に入ってからです。

◇日本映画をよく見たのですか。

子供の頃、黒沢明監督は人気があり、ポーランドでよく上映していました。「ゴジラ」シリーズも、見ました。ワルシャワに出て来てからは古い映画を、特集を組んで上映するところがありました。そこで、よく日本映画をみました。

◇ポーランドのこの頃の生活について伺いたいのですが。

一九八八年から八九年にかけてが一番苦しかった。物不足がひどかったのです。しかし一九九〇年からは、平常に物があるようになった。物価は高いが、物はなんでも手にはいるようになりました。

自由は完全にあります。民主主義国家になった。新聞・雑誌が、たくさん出版されるようになりましたし、世界のいろいろな国の出版物など、なんでも入って来ています。今の問題は、経済のみです。経済は最低ですが、我慢しなければならない時です。働いている一般の人の給料は食料品を買うだけ。そして、年金で生活している人は、もっと苦しい。今は、貧富の差が出て来ていて、中流階級が無い。

ワルシャワの土地値が、すごく高くなった。アパート代が高くて、払えない人もいる。家賃を払わずそのまま入っているので、国は収入が少なくなって、困っています。

先進国の良いところを見習い、ECの援助も期待できるので早くに復興すると思います。

◇ワタさんの出身地ミエローシュフについて、お聞かせ下さい。

ポーランドの南部シレジア地方のワウブジフから、南十五キロの所にあります。チェコとの国境近くです。ワウブジフは、炭鉱の町ですが、ミエローシュフは、空気がきれいなリゾート地が近くにある小さな町です。ワウブジフは、下シレジア地方で、戦前はドイツ領でした。戦後、ポーランドに戻りましたので、東部中央ポーランドの人が、移り住みました。建物は、ドイツ時代に建てられたものが多く残っています。

◇ポーランドというと、ショパンと結びつくのですが……

ポーランドの若者は、クラシックを聞く人は少なくて、ロックミュージックが好きです。

七〇年代、八〇年代、ロックやニューミュージックをやっていた人達は、その歌詞の中に、政治的制度への批判や、生活の現状に対する不満を盛り込みました。今は、体制が落ちついていないので、新政策に対する批判をする芸術家が少なくなった。もう少ししたら、反応が出ると思います。

◇日本に来てから、気づいたこととか、感じたことがありますか。

会う人ごとに、（ほとんどの人達と言ってよいくらい）ポーランドは、何語を話しますかと聞かれます。ロシア語か、ドイツ語ですかと言われて、ポーランド語があるのを知らなかったのに、びっくりしました。

しかし、札幌に、ポーランド文化協会があることにも、驚きました。ボランティアで、皆さんがいろいろな事をしてくれているので、とてもうれしい。

2時間あまりの取材でしたが、ワタさんは大変上手な日本語で答えて下さいました。同席の奥様アンナさんは、ワタさんと同郷で、ワルシャワ大学を卒業し、小学校の先生です。お二人の笑顔が、とても印象的でした。

（文責・清水保子・19号92年8月）

ポーランドで見たこと感じたこと

―三年ぶりの里帰り―

熊倉　ハリーナ

ポーランド語講習会の講師をして下さっている熊倉ハリーナさんが二人のお嬢さんとポーランドに行ってこられました。三年ぶりの帰郷とのことで、いろいろお話を伺いました。

◇三年ぶりのポーランドは、いかがでしたか。

町全体が、色とりどりになって、にぎやかな感じを受けました。人々の服装も、カラフルになりました。品物は豊富になり西側の製品も色々と入って来ています。しかし、物価は高い。

娘の靴を一足買いました。イタリア製で値段は三十八万ズローチでした（ポーランド製は二十万ズローチ位）。ポーランドの人々から見るととても高価です。現在、ポーランドの人々の平均月収が、二五〇万ズローチですから。

電器製品はもっと高い。ポーランド製の掃除機で、一二〇万ズローチ。電子レンジは、月給約一ヵ月分の二五〇万ズローチです。しかし、買物にクレジットカードを使えるようになっていました。以前は欲しいものがあっても物がなくて手に入らなかったが、今は欲しいときに自由に買える。少し高くても色々な中から選んで買えるということの方が良い。

外国料理のレストランも沢山出来ていました。仏・伊・日など。

ワルシャワに「つばめ」という日本レストランが出来ました。ホテルのレストランでなければ、そんなに高くない。しかし、あまり人が入っていなかった。以前は、並ばなければならなかったのに。これは、レストランが沢山出来たということではなく、生活全体が苦しくなったのでレストランにあまり行かなくなったということです。昼食にレストランに入りましたが、サービスがとても良くなりました。

◇教育についてはどうですか。

以前は、社会主義についての授業があったが、今は、無くなりました。しかし、この頃は宗教（カトリック）が強くなり授業に入ってきました。授業に宗教の事を入れる必要はないと思う。大きな町では宗教の授業を受ける受けないは、自由に選べるようになっているが、小さな町では、その授業に出ないと噂になったりして自由がないらしい。宗教は個人的問題なので、全校で取り入れることはないという知識人もいる。今、問題になっています。

◇その他に何か問題になっていることがありますか。

社会主義の時、女性も働いている人がほとんどだったので、女性の力が強くなり妊娠中絶は自由でした。しかし、今は、カトリックが強くなったので、中絶を禁止しようとする法案が提出されています。違法行為をした本人と医師は五年の刑を受けるという内容です。でも、この法案は女性が反対していてまだ通っていない。ポーランドには他の宗教の人もいるのに法律で決めてしまうのはおかしいと思う。

一方、ポーランドの人は外国に出やすくなりました。西側へ向かうエクスプレスが沢山出来ました。ポーランド国内もホテルが増えて部屋も取りやすく旅がしやすくなりました。パスポートを取れば、どこへでも自由に出られるということが大切です。

ハリーナさんからポーランドのお話を伺いながら、国に規制される事なく自由に考え、行動出来るということは、やはりすばらしい事なのだと改めて実感させられました。

（記録・清水保子・２０号９２年１０月）

ハリーナさんの故郷クラシニクで

ポーランドの学校では

―アンナ・ワタさんにきく―

北大留学生マリウシュ・ワタさんの夫人アンナさんに、ポーランドの学校と子供達についてお話を聞きました。

アンナさんは来日前、ワルシャワで学校の先生をしていらっしゃいました。

以下はアンナさんのお話です。

◇まず何才で入学するかというと、いわゆる学校へは七才で入ります。十五才まで八年間が義務教育です。日本の中学までにあたりますね。それを一級から八級までと表します。日本と違うのは入学前に〇級という学年が一年あって、六才になるとこの〇級に入学しなければなりません。これは義務的なものです。ここで文字の読み方をおぼえたり、おもちゃを使って数を二十まで数えられるようになったりと遊びを通して学んで、学校に入る準備をします。

評価はありません。

この〇級に入る方法は二通りあります。幼稚園に通っている子の場合、六才になったとき同じ幼稚園で〇級をすごす方法、もう一つは小学校にある〇級ですごす方法です。〇級のプログラムは全国共通どこでも同じです。

新体制になってごく少数ですが私立の幼稚園、小中学校、大学もできてきましたが、現在のところ〇級のプログラムは公私共通です。

◇ここでちょっと私立学校について話しましょう。

私立の学校の場合、プログラムが国立のそれとは違うので、勉強しないこともでてくる可能性があります。又ある程度それぞれの学校の自主性にもとづいた学習内容なので、子どもがどういう教育を受けるかの保障がありません。それと国立はすべて無料ですが、高い授業料を払わなければなりません。

でもいい点もあります。まず設備がいい。一クラスの人数が少ない。またお給料もいいのでよい教師が集まり、質の高い教育を受けることができます。

教師は自分の考えにもとづいて独自のプログラムをもつことが許されます。一定の枠の中でのことですが今まではなかったことです。

◇次に学習の内容についてお話します。土、日曜日は休みですから週五日学校へ行きます。

まず一級～三級までを初等教育といいます。一級は週十八時間、二・三級は二十二時間。ちなみに日本では一年生二十四時間、二年生二十五時間、六年生三十時間です。

学習する教科は、環境・音楽・算数・国語・工作。

「環境」という教科は、自分のまわりの動物・植物について、知識と関心をもつことから始め、学年が四級になったとき「地理」と「自然」に分かれて、より詳しく学ぶしくみになっています。

五級になって外国語と歴史が加わります。外国語はそれぞれの地域の事情に応じて、例えばロシア語の教師しかいなければロシア語を学ぶ。都会ではだいたい英・独・露語から一つを選ぶことになっています。

六級・七級で物理・化学を勉強し、八級では日本でいう一般社会或は公民というような内容でしょうか、政党・議会、憲法などの勉強をします。体育は一～八級までありますが、四級から男女に分かれてそれぞれ好きなスポーツをします。男の子はサッカーなど。女の子はバレーボール、バスケットボールなど。水泳はどちらもします。

八級で週三十時間の勉強。一時間は四十五分です。

◇新体制になってかわったことは、いくつかあります。

共産主義時代には宗教教育は教会で受けることになっていましたし、教会が差別されていましたので、あまり目立った動きはできませんでした。新体制で自由になってからは、教会の声が大きくなり発言力がついてきました。今は一級から八級まで宗教は学校で学ぶことになっています。

これは残念なことです。宗教は個人の問題であって強制されたくないと多くの人は考えています。今までの体制から自由になったために、反対の方向に極端に行ってしまったけれど、最近は教会の力も弱まって支持者も一時よりは少なくなってきています。ポーランドのカトリック教徒は五〇％を切るのではないかと思います。

先生はそれらの子どもに補習をさせます。今までは先生は補習の分の

報酬ももらうことができましたが、現在は教育予算が少ないのでもらえません。又これまで週十六時間教えればよかったのが、二十時間に増えました。辞めた先生がいても補充せず残った先生がカバーするので大変です。

待遇は、共産主義時代もそれほど良くはありませんが、今はもっと良くないので、これからは教師になりたい人は少なくなるかもしれません。

共産主義時代の方が良かったと思う点もいくつかあります。

まず宗教ですが、これは今お話しました。

次に、以前は学校がお金をもっていて豊かでした。クラスの中には勉強についていけず遅れる子もいます。

（記録・斎田道子・22号93年3月）

音楽と私

ヨーランタ・ルジンスカ

在札ポーランド人に聞く――今回はヨーランタ・ルジンスカさんにお会いしました。

ヨーランタ、愛称ヨラさんは御主人が北大に留学されたので一緒に来日しました。6才になるヤンくんと三人で花川におすまいです。

花川に住んで四年になりますが、住み始めた頃は回りの人々に好奇の目で見られてとても嫌でした。

外に出たくないと思いました。特に記憶に残っているのは、自転車に乗った男の人が行き過ぎてからも物珍しげに後ろを振り返ってヨラさんを見ていてとうとう転倒したことでした。

ヤンくんは今保育園に通っていますが、友だちもできてまわりにとけこみ問題もなくくらしています。

ただ困ったことは、ヤンくんの使う日本語がきたない言葉だということです。ヨラさんは、きれいな日本語を話してほしいと思っています。ヤンくんがはなす日本語が通じないことがあると苦笑していました。

今住んでいる所は、静かで緑が多くて、ポーランドに似ているので好きです。ここに住むことができてとても良かったと思っているそうです。

ヨラさんには主に音楽について話して頂きました。以下はその要約です。

◆ワルシャワ大学合唱団に入って

私はワルシャワ大学で地質学を専攻した古生物学者ですが、音楽が大好きで、在学中二年間ワルシャワ大学合唱団に入団してコーラスをやっていました。

この合唱団は大変レベルが高くて厳しいオーディションにパスしなければ入団できません。殆どのメンバーが音楽を専門に勉強した人や、ワルシャワ大学で音楽学を勉強している人たちです。

ワルシャワ大学にはムズィコロギアという音楽の学部があります。

ここを出た人達は音楽評論家などになるのですが合唱団に多く入っていました。

人数は百人以上です。女性は黒い絹の長いドレスを着ます。そのドレスはそれぞれ異なった色と形の秋の木の葉の図柄が描かれた、とても美しいもので、それを着て唄うのは素晴らしいことでした。

曲目は第一にバッハが多く、次がビバルディ、シマノフスキーそして四番目にイギリスの古い教会音楽です。特に難しいのがシマノフスキーでした。演奏はオーケストラと一緒のことが多く、いつも沢山の人が聴きに来てくれました。

私は大学在学中二年間しか合唱団にいませんでした。というのは一年生の時に学生結婚をし、入団後二年たって子供ができたのでやめたのです。

合唱の練習はとてもきつくて、何時間も立ったままでぶっ続けに発声練習です。それもおなかに力を入れてですから、おなかの赤ちゃんのために良くありません。それでフィルハーモニアと共演のコンサートに出たのを最後にやめました。コーラスは好きなのでやめたことは大変残念です。

◆ピアノと私

私は六才の時から家でピアノのレッスンを受けていました。小学校に入るのと同時にミュージックスクールにも入って音楽を学びました。ミュージックスクールというのは普通の学校の傍ら通う音楽だけの学校で、公立ですから授業料はかかりません。七才から十五才までピアノを勉強し他に小学校から大学まで十二年間ずっとコーラスも続けました。

五才の時に受けた音楽テストで良い耳と才能を持っているといわれたので、両親は、ピアノを習わせてできればプロにしたいと考えたようです。あくまで希望としてですが。

学校の他にマリア・ビッティホフスカ先生という年をとった有名なピアニストに個人レッスンを受けることになりました。でもあまりの厳しさに私はピアノが嫌いになってしまいました。その先生は優秀な生徒を八人選んでショパン協会の発表会に出演させ、順位を決めるということを年二回しました。私も八人の中に入ってはいましたが、ピアノをひくのがいやでした。八人のうち二人はプロのピアニストになりました。もっと練習が楽しかったらやめずに続けたと思います。

父は私が六才の時から、オペラの席を年間予約してくれましたので、ずっと毎週木曜日にはオペラを聴きに行っていました。ですからオペラは今も好きですし、コーラスも、それとピアノも聴くのは好きです。ピアノはやめて以来、ただの一度もひいていません。

◆ビッティホフスカ先生のこと

先生は練習がうまくいかないとたいたりするような厳しい方でしたが、大切なことを教えて下さったのだと、今になって気がつきました。

それは教え方や仕事に対する意欲と責任感です。先生はその二つとも強い方でした。それはとても大切なことで、私は先生を通してそのことを学んだし、又音楽のことがよくわかるようになったのも先生のお陰だと思っています。音楽の深さや意味を教えてもらったし、今も音楽が好きなのは彼女のお陰です。

めったに人をほめない先生でしたからたまに（習っている間に五回くらい）ほめられると、それはもう本当にうれしかったものです。

もし私の子どもが良い耳をしていたら、多分ビッティホフスカ先生のような厳しい先生につけたと思います。

私の子ども時代は、音楽、新体操、水泳、スペイン語といろいろなことを習っていたので、遊んでいる子がうらやましかったけれど、今はそれも良かったと思っています。

今残念に思っていることは、日本に来てからは主婦として家庭にいるということです。夫は研究に打ち込んでいますので、その姿をみているとうらやましいです。私もポーランドに戻ったらまた大学で、学者として学問を続けるつもりです。そして音楽は趣味として楽しみたいと思っています。

（文責・斎田道子・23号93年8月）

考古学を学ぶアンナさん

ポーランドから北大に留学中のアンナ・ボージエクさんにインタヴューをしました。

◇アンナさんはワルシャワから札幌へ来て、北大の研究生として考古学を専攻しています。ポーランドの大学で日本の考古学を勉強して興味を抱きもっと深めたくて来日しました。

ポーランドでは大学二年の時からこの学科を選んで五年間勉強しました。日本の考古学は、日本学科の中に、言語学・文字・歴史の各学科があって、そのうちの「歴史」の中に含まれます。

大学の日本学科に入学した学生は全部で二十人いますが、そのうち卒業できたのは十二人。それが全員女性だそうです。卒業できない人は大学をやめなければなりません。日本の大学のように留年はないのですね。それにしても学生に厳しいですね。卒業できたのが全員女性ときいて、ポーランドの女性の実力にびっくりしました。

◇日本の大学に来たわけは、縄文時代についての卒論と口頭試問がとてもよかったので、教授に、日本へ行ってもっと勉強してはどうかと言われたからです。それまで日本で勉強することなど全く考えてもいなかったのですが、そう言われてすぐに承諾の返事をしました。

卒業した十二人のうち、アンナさんともう一人が日本に来て、その一人は東京にいます。アンナさんは特に札幌を希望したわけではないのですが、文部省の決定でここに来ました。去年の六月に大学を卒業し、仕事を休職して今年の二月二十日頃に札幌へ来ました。

考古学の中でも特に縄文時代に興味があります。日常生活に使われた道具である石器や土器を研究しています。

毎日のくらしでは、食べ物はたいてい何でも食べられますが、パンはポーランドのパンの方がいいそうです。住まいについては暖房が不十分で、家の中が寒く感じます。まだ来て間がないのでどこへも行っていないし、札幌についてもよくわからないということでした。

これからは発掘の実習もあるし、本も沢山読まなければならないから毎日が忙しくなりそうだとも。

仕事は休職して来ましたが、ポーランドに戻ったら、ポーランドに進出した日本の会社などへの就職も可能だそうです。

ポーランドでも一般には待遇に男女差があります。差のないのは、教師・医師・ジャーナリスト等で、女性が多いですし、どうも日本よりポーランドの方が女性にとっては働き易いようです。

お会いしたアンナさんは、にこにこした若々しい方ですが、とてもシャイでインタヴューはあまり好きではないようでした。でも上手な日本語で真剣に答えて下さいました。

来札間もない時のインタヴューでしたのでわからないことも多かったと思います。今ならもう少しいろいろなことに答えて頂けたのでしょう。

（文責・斎田道子・27号94年8月）

暮らしやすくなったポーランド

熊倉ハリーナさんのレポート

私がワルシャワのオケンチェ空港に着いたのは、五月二日の昼でした。大変暑い日で、迎えに来てくれた従姉妹は、もう夏のワンピースを着ていました。私が札幌を出発する時、まだ咲いていなかった桜やライラックの花が満開でした。

ポーランドでは、五月一日（水）のメーデーと、五月三日（金）の憲法記念日は祝日です。民主化以来、五月二日のなか日も国民の休日となりました。土・日曜日と続いて、日本のゴールデンウイークなら、どこも混雑しているのに、あまり静かなので、ちょっとびっくりしました。

従姉妹の家まで、タクシーで行くことにしました。空港ビルの前には、メルセデス、ボルボといった高級車のタクシーがいっぱい並んでいました。しかし、彼女は、「これらはとても高い運賃なので、違うタクシーに乗りましょう」と言いました。それから、五十メートル位歩いて、ポーランド製の車のタクシーに乗りました。十分程乗って、四十ズローチ払いました。（1ドル＝2・72ズローチ）。この値段も決して安いものではありません。私はびっくりしました。でも高級車のタクシーではこれの2倍はとられます。この高いタクシーは、高級ホテルの前、空港、駅などの所にとまっているのです。これには、ポーランド人は「マフィアのタクシー」と呼んで乗りません。「マフィア」と呼んでいますが、タクシー業の許可は得ているのです。これらは、外国人やワルシャワに住んでいない人が知らずに利用するのです。ポーランド滞在中、何度かタクシーに乗りましたが、普通に使うタクシーは、日本の様に車の窓のところに値段がはってあります（1キロメートル＝1ズローチ）。

もう一つびっくりしたことがありました。買い物が大変スムーズにできる様になったことです。帰国前日に、主人といろいろおみやげなどを買うためにワルシャワの中心に出ました。見て歩いている時、紳士物の洋装店を見つけて入りました。夏の背広が沢山そろっていました。すべてイタリア製でした。主人は、スーツとズボンを買うことにしました。試着して、ズボンが長かったので丈を短くできるかどうか、店員に聞きました。そうすると、店員は、「一時間で出来ます」と答えました。昔はとてもこんなことは考えられませんでした。主人は、十八年ぶりにポーランドに行きました。昔の様に一日でほしいものが手に入ると思わなかったのが、あまり豊富に品物があったので、つい、いろいろと買い物をした様です。そして、その買い物は、すべてクレジット・カードで済ませました。

買い物の途中、レストランで昼食をとりました。注文すると、すぐ料理が出て来て、味も良くなったみたいです。そして、何よりサービスが良くなったことに気がつきました。

民主化になった頃は、店の人は、そんなにサービスしなくても売れました。しかし、この頃は、いろいろな物が沢山あるので、人々はあわてて買わなくなった。そのため、店の人は、サービスを良くして購買意欲をそそるように努めています。

私は、昨年と今年、ポーランドに行きましたが、いつも短い滞在なので、インフレのつらさはあまり気がつきませんでした。

しかし、ポーランドの家族の話によると、インフレのために一カ月の家計の計画が立てられないと言います。それは、毎日の様に日用品の値段が変るからです。

この頃はインフレがおさまっ

て来ています。一九八九年の後半は、２０００％にもなりました。それが、一九九〇年後半には２５０％になり、今年五月頃からは、９年間で初めて、２０％以下になりました。だんだんと、人々が暮らし易くなってきています。（談）

（３４号９６年７月）

紋別のグルメ

マジェーナ・ティムチョ

今年の二月に、ハリーナさんと一緒に紋別のグルメ料理交流会に誘われました。紋別ってどこのところと関連づけたらいいか、さっぱり分かりませんでした。そこで日本人に聞いてみたら、「いいね、もしかしたら流氷が見られるかも」と言う。流氷？　それでは、紋別って札幌よりずっと寒くて北から海に直面していると何となく想像が付きました。暖かいマフラーと帽子を着て、旅行に出かけました。

丘珠空港から、二人はプロペラ飛行機に乗ってから、およそ一時間後、紋別に着きました。驚いたことに、飛行機は満席で、二人が一緒に座れるところもなかったから、おしゃべり好きなハリーナさんとゆっくり話はできませんでした。それに、プロペラの音で声があまり聞こえないこともあったので、我慢するしかありませんでした。隣の席に座った日本人の方は、その後、明らかになったが、グルメ交流会と同じ時行われている「オホーツク海と流氷」というシンポジウムの参加者でした。

紋別でシンポジウム

そのシンポジウムは同じような気候、風土、生活環境を背景としたアメリカ、ロシア、カナダ、北欧など北方圏の国内外の科学者が毎年の二月、流氷の渡来時期に合わせて（今年は残念なことに、近くに来てくれなかった）紋別に集まり、流氷や氷海に関する研究、調査、発表などが行われます。そのほか、市民の多くが参加できる様々なイベントもあります。私達が誘われた国際グルメ交流会はその一つでした。ただ二人の外国人の参加者になると思って緊張していた私は、結局、多数の外国人と国際的雰囲気にかこまれることになったので、ほっとしました。

私達のグルメはシンポジウムが始まってから、次の日にありました。グルメ料理講習会は豊かな経験を持っているハリーナさんにおまかせにして、ポーランドの伝統的な料理であるgolabki（ご飯入りロールキャベツ）と特に子ども達に人気のあるjablka w ciecie（りんご入りホットケーキ）を紹介することになりました。今年のグルメは十一回で、前に参加したのは北方諸国のロシア、スウェーデン、デンマーク、カナダ、ドイツ、中国、フィンランド、スロバキアなどの国だったそうです。このような豊富な伝統を持っている紋別市はグルメに必要な準備万端を整えてくれました。私達のプロフィールやポーランドについての情報とポーランド語一口メモさえ入っているパンフレットまでつくってもらったのです。グルメの参加者は当地方の新聞の募集で選ばれた、約五十人の女性達で、その中の多くは紋別の主業である漁業に携わる漁師の奥さんたちでした。家庭料理がお上手なハリーナさんがまもなくその場の波に乗って、さっさと次から次へと説明には入っていました。さすが、通じなかったことは一つもなかったのです。ポーランドの家庭で時間をかけるあまりにも面倒臭い料理の一つであるgolabkiでもあっという間に出来上がりました。今度、自分で作ってみようかなと私も思ってしまいました。料理の味は皆に大変ほめられたが、その理由は、ハリーナさんがポーランドの伝統的な味を日本の好みとうまく合わせることが出来たところにあると私には思われます。交流が大成功に終わったおかげで是非もう一度参加してほしいと言われました。運が良かったら、懐しくおいしいポーランドの料理を食べる機会にまた恵まれるかもしれません（自分でなかなか作ることが出来ないわけ）。

オホーツクタワーへ

グルメを終わって、今度、市役所の二人の担当者につれられて、紋別の観光に出かけました。最初に見学したのは、海底から流氷の様子が観察できる世界初の氷海展望塔、オホーツクタワーでした。このタワーは、海上三階と海底階に分かれ、海底から四十六ｍの高さにあり、その中では、かわいいクリオネリマキナが見られる水槽や映像ホール、展示ホールなど流氷の神秘を身近に感じることが出来ます。その後、オホーツク流氷科学センターのマイナス二十度の厳寒体験室で本物の流氷に触れてから、直径十五ｍの全天周映像ホー

ルで流氷原が映し出され上空から見たオホーツクを視覚的に体験しました。最後のアトラクションはガリンコ号という流氷砕氷観光船でした。砕けた流氷と海水とが織りなす神秘的な色彩の模様は、不思議な魅力を持っていたが、船に酔ってしまった私には、残念ながら、これをなかなか感じることが出来ませんでした。

わずかな三日間で、交流、イベント、アトラクションで、疲れるほど日程がいっぱいでした。だが、札幌での生活にそのような冒険ができるチャンスがめったにないため、かえって胸を踊らせていました。素晴らしい思い出をどうもありがとう。

（北大留学生・36号97年4月）

札幌でおもうポーランドのこと

アレクサンドラ・モクシンスカ

札幌に来てから、もう五か月が経った。千歳空港に着いたのはある寒い真冬の日だった。今住んでいる七階のアパートから緑で溢れている北海道大学のキャンパスを見回すと、吹雪の中で無事に着いたよという連絡を家族にしに行ったあの最初の夜の町が同じ町なのかなと思っている。札幌は随分変装したな。私もこの町みたく変わってきた。もうポーランドのことを考えてばかりいないで、ようやく新しい状況や生活に馴れてきた。

馴れたというものの、やはり忙しくても、一日に一回インターネットで流されるポーランド新聞をちょっとだけ覗かないと元気を出せない。

ある日、普段通り北大にあるパソコンルームを訪れた。そして大きなニュースを発見した。三月二十七日にアンジェイ・ワイダ監督はハリウッドでオスカー賞を受賞した。受賞式に参加した芸能人がスタンディングオベーションをした。これはみたいなとマウスで画面の頁を捲りながら考えていた。ワイダ氏はオスカー賞を監督の卵に捧げた。「彼らの作品も将来、世界に出るように祈っております。矛盾ですが映画はポーランド風であれば、あるほど、さらにいっそう国際的な注目を引くと思っております」。この言葉を証明するのは九九年に出来たアダム・ミツキェヴィチの「パン・タデウシ」の映画化だろう。去年の暮れにこの作品を見て奇妙な誇りめいた気持ちを思い出す。

ワイダ監督はデビューしてからもう半世紀近くなる。処女作は五三年に作られた「バルスカ通りの五人 PIATKA Z ULICY BARSKIEJ」である。受賞までにワイダ氏は四〇作品以上撮影した。その中の大部分は多くの国で放映された。日本でもワイダと言えば大勢の皆様はすぐ「地下水道」と答えるだろう。北大の図書館のマルチメディアルームを覗いて見たらワイダ氏の数点の作品が書架に置かれていた。

その日、新聞を読み終えて、五六年に出来た「地下水道」を見ることにした。この映画はワルシャワ蜂起（一九四四年八～九月）で戦っているある一つの若者の中隊の行方を語っている。ワルシャワ蜂起は九月下旬に終わりつつあって、十、二十代の兵士達は否応無しにジョリボシ区を退却することになる。回りにドイツ軍が迫ってくるので、背水の陣という緊急事態。命を救うには地下水道で中央区まで引き下がらなければならないのだ。青年は死ぬまで戦いたがるけれど中隊長の命令にしたがわなければ仕方がなく一人一人次から次へと地下に降りてゆく。ジョリボシ区から中央区まで十五キロ位だろう。なんて辛い行進だろうと同感する。主人公達は勇気出しながら狭くて低くて、下水でいっぱいである地下水道を進む。ドイツ人はガス爆弾を落とすため、澄んだ空気が不足して息苦しくて皆は死にそうだ。おまけに道に迷って大きな迷路に落とされたみたく、冷静でいられない。若い兵士達は生き残るかを、お知りになりたいなら「地下水道」を見てご自分でお確かめ下さい。

「地下水道」は私にとってとても大事な映画だ。私の住んでいるところはジョリボシ区だ。それどころかこの作品は私の家族の物語なんだ。私の祖父と祖母も当時それぞれに二十三歳と二十二歳でワルシャワ蜂起に加わった。祖父は旧市街から中央区まで地下水道で退いたのだ。祖母は資格がなくても看護婦隊に参加して戦の起こる所にいつもいた。

なんで私はワイダ氏の映画が好きなのだろう。刺激的であって大事なことを考えさせられるからなのだろう。白黒の四十四年のワルシャワから、二〇〇〇年の咲いている花に彩られた札幌に戻った。平和な時代の中で生きていて、なんて幸せなんだろう、私。

（北大文学部研究留学生・45号00年6月）

ポーランドと似た北海道の森や動物

スワヴォミル・マズール

私は、スワヴォミル・マズールと申します。ポーランドのワルシャワ農業大学林学部に勤めて三十年以上になります。現在、私はこの学部の教授であると同時に、森林保護・生態学科の学科長でもあります。この学科では、私を含めた研究チームがポーランドの昆虫についてあらゆる観点から研究しています。とくに、森林生態系における昆虫の役割に注目しています。

ずいぶん前に私は、世界中に分布する甲虫の一種、エンマムシ類についての研究を始めました。その研究はやはり森林と関連しています。とくに、樹皮の下に生息している種に関心があります。この種は、ヒメナガエンマムシ族と呼ばれるのですが、これこそが北大の大原昌宏先生と私たちとの共同研究のテーマなのです。私たちは何年も前に、お互いのことを知り、手紙や学術論文を交わしたり、評し合ったりしてきました。そして三年前、ポーランドと日本の学術協定の支援を受けて、大原先生がポーランドを訪れました。これが、私たちの共同作業の転機になりました。強力になった研究体制と大原先生の聡明なる力のおかげで、樹皮下生活をするエンマムシ類に関して、三部から成る論文を出版できました。

私が札幌へやってきたのは、この研究計画の続きです。大原先生がおられる北大総合博物館は、仕事を進める上で絶好の環境ですから、大変うれしく思っています。妻のクリスティーナと私は、日本の美しさに深く魅了されました。すべてが日本の文化と結びついていますが、なによりも人々と結びついているのがわかります。

実は、私たちの日本訪問はこれが最初ではありません（最初の来日は一九九九年八月）。二年前、私は北京の中国科学アカデミー動物学会から招請を受け、中国の動物相の系統発生と起源について長期の共同研究を行なうために赴きました。それが、日本の友人たちと出会える最良の機会になりました。それで、私たちの旅を日本まで拡張しようと決めたわけです。

なんと素晴らしい時を過ごしたことでしょうか。私たちは奈良、大阪、京都の周辺など、最も古くて美しい土地を旅しました。それは忘れ難い体験です。日本の歴史を生み出した場所のすべてを、この目で見ることができるなんて！　とても豊かで長い歴史です。人類の歴史がヨーロッパに限られたものでないこと、この世界が様々な文化、宗教、文明によって生み出されたものであることを知るのは、とても大切です。

それから、新幹線で東京まで快速の旅をしました。東京は京都とはまったく違う都市ですが、やはり驚くことばかりで、変化に満ちています。

これが、私の最初の「日本の感触」でした。話を札幌に戻します。

最初に札幌に着いたとき、奈良や京都のような場所が見当たらないことを不思議に思いました。しかし、それは第一印象にすぎませんでした。長く滞在すればするほど、札幌がたくさんの公園、美術館、スポーツ施設などを備えたモダンで快適な都市であることがわかってきました。

また、北海道を訪れてみて気づいたのは、ポーランドの自然と多くの点で似ていることです。それは山、平野、川などです。とくに、森林学者としての私には、ポーランドと同じ形をした森や林や動物たちと出会えるのが驚きでした。北海道の自然は、どんなに原始的な豊かさをたたえていることでしょうか。

それとは全く別の話題ですが、札幌に大きなポーランド人コミュニティーがあることは私たちにとって驚きでした。十五人以上ものポーランド人がここに定住しているのです。毎週水曜日、私たちは会って話をし、新しい知らせや本のことや、感じていることを話し合います。なんと驚くことに、流暢にポーランド語を話す日本人数人にも会いました。

こんなわけで、妻も私も、札幌に来れてとても幸せです。日本の科学者たちと共同作業できるのはもちろんですが、なによりも日本を深く見ることができるのをうれしく思います。

（51号02年9月）